



▲「貧乏クセ老百姓らしくして、待ってつからヨー」。取材の日程調整の電話をかけた時、安原さんはそう悪態をついて照れていた

鍬で耕す男 安原栄一さん

プロフィール

安原栄一さん（42歳）

千葉県八千代市。

野菜作1ha、果樹(巨峰)80a、水田60a。
約15年前より、野菜作での深層施肥と反転耕をするために鍬を使っている。

仲間たちとともに組織化した産直ルートなど、販路開拓にも熱心である。

「鍬を使うようになつてネ、手が腱鞘炎になつちやつた。これで俺も立派な文化人だよネ、ハッハッハ…。でもそれで腰痛が直っちゃたんだよネ」

安原栄一さん（42歳）は笑った。

安原さんは『鍬で耕すこと』にこだわっている。鍬を使って土を反転させ、肥料は深部に施して幼根に触れさせないようしている。このように自然の摂理に合う耕し方をしようとしたら、手元にあるのは鍬だけだった。

しかし彼はロータリーを使っている。
ロータリーは、鍬で土を反転させるための前処理として軟らかくしているだけだ。『耕す』つてのは、動作で言うなら土

を反転させること。意味で言えば、作物が育ちやすい畑の条件を作ることだ。だとしたらロータリーをかけることで『耕した』って言えるか?』
だから、彼は一五年間、鍬を振るつてきた。

鍬を使って作物が見えた

彼が鍬を使うようになったのは一五年前。農業を始めた一八歳から二八歳まで、彼にとつてもロータリーで土をかき回すことが耕すことであり、施肥した後、ロータリーで整地してホウレンソウを播種するという「作業の手順」を農業の仕事だと思っていた。

ところで彼の冬作はホウレンソウとネ

ギが主体である。ホウレンソウでは一〇aで八〇〇〇束以上をコンスタントに出荷するという人だ。

彼は、農高を出てから何年かは、東京に出て仕事をしたりしていた。結婚し農業に本気になり出したころ、ベト病が出て三日間で一〇aの畑が全滅するという体験をした。

野菜作りの栽培基準を覚えるのは難しくはなかつた。それなりの技術は覚え、少し工夫すれば自分は人より上手な野菜作りができるという自惚れすらあつた。これで自分の思い通りになると思つていた矢先の被害だつた。

そんなある日、雨あがりの朝だつた。施肥してロータリーをかけた雨の後の畑一面が白く光つて見えた。よく見るとそれは肥料の粒が土に浮いて光つて見えていたのだった。彼はその瞬間に直感した。
「今のやり方は間違つていい」

それは技術が間違つていいというより、自然との接し方、あるいは自分の農業そのものが間違つていいという一つのひらめきだつた。

「人のありようを含めて自然は法則があつて成り立つている。いくら自分の通りにしようとしても、その法則を、土という命や作物の生理を無視して健全に作物を育てられる訳がない」

自然の摂理と矛盾する技術体系

畑に光る肥料の粒を見て思ったのは直感であったが、数年後、彼は普及所から回ってきていたロータリーによる土層深度別の肥料分布についての解説を読んで作物を育てられる訳がない

合点がいった。

それには、畑全面に粒状肥料を施肥し

ロータリーを耕深二五cmでかけると、九

ある。

7%の肥料は表面から七・五cmの部分に集積するとあつた。雨が降ればロータリーワークした土は沈む。彼はそれが光っていたのだろうと考えている。

安原さんは、播種後あるいは定植後すぐの作物の根の周辺に、元肥の九七%に達する高濃度の肥料が与えられていることの異常さに気付いた。

彼は巨峰も栽培している。そして、巨峰の育種者である農学者・故大井上康氏に大きな影響を受けてきた。大井上康氏の栄養周期理論によれば、発芽した種子が胚乳の栄養で育つ時期、その間はむしろ栄養が欠乏した環境であることが成長にとって望ましいのだという。これは魚やオタマジャクシ、あるいはもつと高等な動物でも同様なのだという。作物の場合であれば、播種後一〇～一四日くらいうまでがそれに当たる。その間に作物の根は一五cmくらいに伸びるという。



▲▼鍬で耕す。道具の違いはある、ブラウの反転と原理は同じ。安原さんを先輩として慕う石神信雄さん(38歳)に鍬の扱いを教える



ところが、過剰な施肥や農薬、そしてロータリー耕一辺倒の表層だけの攪拌耕と過剰碎土などが、その相互作用を破壊してしまった。相互作用が保たれていれば、線虫やダニ、昆虫たちは今ほどイタズラ者ではなかつたはずだ。

「今、有機農法だとか、いろんな資材だとか團粒構造だとかといつても、そんなものは、自然の法則に無理せず作物を作

知識でなく知恵と知覚を養え

かつて農民は、土や作物の命やその生命数力を、手で触れ、足で踏みしめ、鼻で嗅ぎ、目で確かめることで引き出してきた。

安原さんは、機械や肥料や農薬の存在を否定する人ではない。むしろその研究には人一倍熱心で、メーカーの人を講師

つていけば結果としてできていくんだつて昔の人は知つていたんだよな。だつてね、鋤とわずかな肥料だけで、大正時代に米を一二六〇kg(二一俵)も取つている人がいるんだよ。めちゃくちや土作つたんだろうけどね。今、こんなに機械や肥料があつて五百数十kgでしょ、馬鹿げていると思わないか」

合うやり方だとえた反転耕や深層施肥をやるのに、とりあえずそれしか手段がなかったからだ。しかし安原さんは、トラクターから降りて鍬で耕して一番良かったのは、土と目との距離が近付いたことなのかもしれない」と振り返る。

土の色や湿り気で明日の天気が分かるようになり、木や竹の葉の色を見てカラーチャートに出来るようになった。木の芽や花、あるいは周りの景色を見て今何をするべきかが分かるようになってきたのだ。そうなると、作物を育てることが昔よりずっと簡単になった。そして人がなぜこむずかしい『技術論』に躍起になっているのかと笑えるようにすらなつていたと言ふ。

それは彼にとつて、自然の摂理を無視した新技術の導入や指導のありようを馬

に迎えて勉強会を主催するような人である。しかし、現在の農業技術や農業指導に強い批判を持っている。

「今の農業界には農家自身を含めて先生や評論家や文化人や商人ばかりが氾濫している。俺たちは生きるために農業しているのであって説明したり解説するため農業しているのではない。数字や計算や言葉だけで経営はできない。それだけなら今までやつてきたことの中に落ち込むだけ。知識は覚えれば覚えることだ。問題は知恵であり、自然の変化を感じる知覚であり、感性ではないかと思う。知恵は単なる対策のハウツーではなく解決能力そのもの、知覚は単に器官があることでなく感じる能力のことなんだ」

だからこそ安原さんは、鍬を使い始めたのだ。

彼が鍬を手にしたのは、自然の摂理に合うやり方だと思った反転耕や深層施肥をやるのに、とりあえずそれしか手段がなかったからだ。しかし安原さんは、トラクターから降りて鍬で耕して一番良かつたのは、土と目との距離が近付いたことなのかもしれない」と振り返る。

土の色や湿り気で明日の天気が分かるようになり、木や竹の葉の色を見てカラーチャートに出来るようになった。木の芽や花、あるいは周りの景色を見て今何をするべきかが分かるようになってきたのだ。そうなると、作物を育てることが昔よりずっと簡単になった。そして人がなぜこむずかしい『技術論』に躍起になっているのかと笑えるようにすらなつていたと言ふ。

それは彼にとつて、自然の摂理を無視した新技術の導入や指導のありようを馬

んの歴史」をくぐり抜けてきたものなのである。

大事なのは「ラウではない。肝心なのは、自然の摂理に矛盾しない技術の組み立てであり、それを取り戻すために意地を張つて鉢をふるい続けてきた彼の「意志」そのものなのである。



▲リバーシブルプラウを使った畑では、金属部分に土が付いた。それを見て安原さんは「土ができると、土なんか付かなくなるよ」と自分の鉢での体験を解説してくれた



▲仲間たちが共同で借りることにしている畑でラウをかけると、安原さんは「ここは土の臭いが悪いだろ」と解説していた



▲ミニラウ(13psから適応)でラウの体験をする石神さん



▲「不器用な人だから…」とつぶやいた敏恵さんの言葉には、ともに歩もうと思う者の意志を感じた



▲安原さんは木酢液を取る目的と、東京の小学生向けの農業体験の場として、炭焼き小屋を作った

ラウをひいていく様子を見て、安原さんは「もつと早く知りたかった」と、つぶやいた。

しかし、安原さんが理解しているところでは、「不器用な人だから…」とつぶやいた。安原さんは「もつと早く知りたかった」と、つぶやいた。

奥さんの敏恵さん(41歳)がネギの苗畑で草取りをしながらボソリと言った。

「あの人、不器用な人だから…」

しかし、それは古いドラマにありそうな堪え忍ぶ女の言葉ではない。愛情と信頼から同じ道を歩もうと決意した同志の言葉だと筆者には思えた。

この「農業経営者」と名づけた雑誌の創刊号の経営者ルポとして、嫌がる安原さんにあえてご登場頂いたのも、それゆえなのだ。

奥さんの敏恵さん(41歳)がネギの苗畑で草取りをしながらボソリと言った。

「あの人、不器用な人だから…」

しかし、それは古いドラマにありそうな堪え忍ぶ女の言葉ではない。愛情と信頼から同じ道を歩もうと決意した同志の言葉だと筆者には思えた。

誇りと意志が作る経営

鹿馬鹿しく思えるようになる過程であつた。また同時に、己の人生の思い上がりに釘を打たれているのにも気付く過程でもあつたという。

筆者は今回の取材を通して、初めて安原さんにラウを勧めた。安原さんとの付き合いは以前からのものであつたが、

その時までラウが大型トラクターでなければいけないので、という彼の誤解を解いていかなかった筆者自身を恥じた。

一三馬力でひけるラウもあるのだ。今回の中にはスガノ農機の人々も参加して、安原さんの仲間に呼びかけて。ラウの実演をした。安原さんを除く参加者たちにとっては、何度もかの「体験教室」であったが、小型トラクターが簡単にプ

ラウをひいていく様子を見て、安原さんは「もつと早く知りたかった」と、つぶやいた。

しかし、安原さんが理解しているところでは、「不器用な人だから…」とつぶやいた。安原さんは「もつと早く知りたかった」と、つぶやいた。

奥さんの敏恵さん(41歳)がネギの苗畑で草取りをしながらボソリと言った。

「あの人、不器用な人だから…」

しかし、それは古いドラマにありそうな堪え忍ぶ女の言葉ではない。愛情と信頼から同じ道を歩もうと決意した同志の言葉だと筆者には思えた。